令和２年１１月１０日

保護者様

京都市立岩倉南小学校
校　長　石田　和三

学校教育目標の実現に向けて

～「子どもたちの声」をもとにした「自己評価」と「学校関係者評価」～

岩倉南小学校では，学校教育目標の実現に向けて，「思いやりのある子（徳）」「自ら進んで学ぶ子（知）」「体を大切にする子（体）」のそれぞれにおいて重点目標を設定し，具体的な取組を進めています。

また，目標の達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について教職員自身が行う「自己評価」と，学校運営協議会が，自己評価の結果について評価する「学校関係者評価」を実施し，それらの結果を家庭，地域と共有することで，教育活動の改善と発展を目指しています。ここでは，自己評価及び学校関係者評価の結果について，それを踏まえた今後の改善方策と併せてお知らせいたします。

自己評価の評価項目・指標は，次の２つに大別できます。

①　目標の達成状況を把握するための（成果に着目する）もの
②　達成に向けた取組の状況を把握するための（取組に着目する）もの

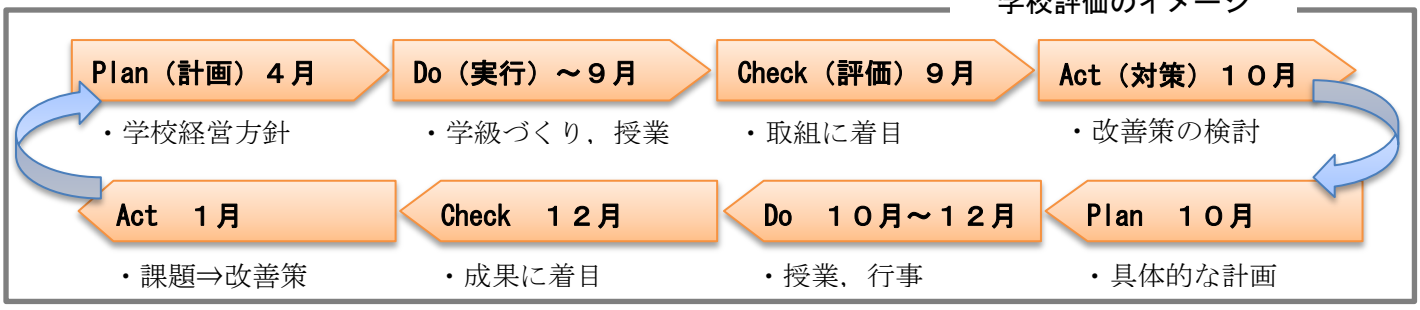
例年は，夏休み前に①のアンケートを実施しています。

ただ，約２か月間の休校と６月の隔日登校などを踏まえると，成果に着目したアンケートを今の時期に例年通りに行うことには無理があるのではないかと考えました。そこで，

- まずは，６月の学校再開から今日までを振り返り，目標の達成に向けた取組の状況を把握・整理する
- 整理結果をもとに，これまで進めてきた取組が適切かどうかを評価する
- それらを踏まえて今後の改善策を検討し，２学期の取組に反映させる
- ２学期末を区切りの時期として，アンケートを実施し目標の達成状況を把握・整理する

という流れで，今年度の学校評価を実施することにしました。

学校評価のイメージ



今回実施したのは，重点目標の達成に向けた取組の状況を把握することを主とした，自己評価です。

もちろん，何の手がかりもなく，自己評価を行うことはできません。自己評価を行うためには，子どもや保護者がどのような意見や要望を持っているかを把握することが重要です。

そこで，手がかりとしたのが，子どもたちが授業や生活の中で記述する「振り返り」です。子どもたちが書いた「振り返り」の中から，重点目標や具体的な取組に関するものを「子どもたちの声」として抜き出しました。（紙面では少ししか紹介できませんので，「子どもたちの声」については，ホームページ上に公表予定です。）

今回の方法では，アンケートと違って，全体的な傾向をつかむことはできません。

一方で，アンケートよりも具体的な子どもの姿が見えます。その姿をもとに，これまで進めてきた取組が適切かどうかを評価し，取組を継続する上で大切なことは何かを分析する。そのような形での自己評価の結果をお伝えいたします。（今回は，「徳」「知」「体」のうち，「徳」「知」に絞っています。）

学校の自己評価の結果

思いやりのある子（徳）

【重点目標】

「自他を大切にする態度」「公共の精神に基づく態度」の育成

【具体的な取組】

□人と人とのつながりを大切にできるように，あいさつ（あいてを見て，いつも，さきに，つづけて）を徹底したり，たてわり活動を充実させたりする。

□支え合い高まり合う集団をつくるために，教師が子どもたち一人一人のよさを的確に「見抜き」「認め」「ほめ」「伸ばす」ようにする。

【子どもの声】※（　）の数字は学年

□あいさつの徹底

・この頃，挨拶ができてうれしい。前は誰にも挨拶できなかったけれど，今は楽しいなと思う。（3）

・地域の人にも挨拶できた。笑顔で「こんにちは」と言うと，挨拶が返ってきたので嬉しかった。通学路で工事の人にも挨拶をしたら，とても気持ちよかった。（3）

・自分から挨拶するときもあるけれど声が小さくなるから，声を大きくして挨拶したい。（3）

・学校ではできたけれど，地域ではあまりできなかった。２学期は，勇気を出して挨拶したい。（4）

・近所の人は私に挨拶をしてくれるけれど，自分は挨拶をすることなく通りすぎるから，自分からできるようにしたい。（4）

・近所の人にも自分から挨拶できたけれど，元気に笑顔ではできなかったから，元気な声で明るく挨拶をしたい。（4）

・地域の方へは初めは緊張して声が小さくて聞こえてなかったけれど，ちゃんと挨拶ができたとき，とてもスッキリした。（5）

・挨拶ができると気持ちがよかったので，これから，もっといろんな人に挨拶をしたい。（5）

・自分から挨拶しても声が小さかったりするので，もっと大きな声であいさつをするようにする。（5）

・教室に入った時に，「おはよう」と言ったらほとんどの人が返してくれた。挨拶は返事をしてくれなくても気持ちがよくなることだと思った。でも，やっぱり返してほしいとも思った。挨拶はコミュニケーションをとれるものだと思うし，元気よくみんなに挨拶したら，いつかは返してくれると思うので，続けたい。（6）

□支え合い高まり合う集団づくり

・係で役に立ててうれしかった。今度はもっと頑張りたい。（3）

・教室での係活動は，少しだけみんなの役に立てたような気がして嬉しかった。（3）

・クラスのみんなが面白くて，ユーモアがあって話しやすい。（4）

・明るくて面白くて楽しさがあって，誰かが困っている時は助けられる優しいクラスだと思う。（4）

【今後に向けた改善の方策】

□あいさつの徹底

中学年～高学年の子たちの中には，「自分から地域の方や学校のみんなに挨拶をできるようになりたい」と思っている子がたくさんいます。まずは，その子たちの気持ちを応援したいです。

わたしたちは挨拶について，「している」「していない」だけで評価してしまいがちです。挨拶は相手があってのことですから，誰にでも見える姿をもって評価するのは当然のことです。ですが，「見える姿」だけにこだわってしまうと，「なぜ，挨拶をしないんだ」と説教したり，「挨拶とは…」と懇々と諭したり，という指導に陥ってしまいます。あるいは，「人と会ったら大きな声で挨拶しましょう」と，相手や状況に関係のない挨拶を求めてしまうことになります。

子どもたちも，挨拶がいかに大切か，これまで様々な場面で言って聞かされてきたはずです。でも，いざとなると自分から声が出ない。声が出ても小さくなってしまう。友だち以外には挨拶しにくい。ということではないでしょうか。

そのような子たちの「自分から地域の方や学校のみんなに挨拶をできるようになりたい」という願いを実現するには，どうしたらよいのでしょうか。そのヒントは「挨拶ができるようになった」という子たちの振り返りの中にあります。

「挨拶ができるようになった」という子たちの振り返りには，「嬉しい」「気持ちがよい」「スッキリ」という言葉がよく出てきます。この子たちは，挨拶の大切さを，実感を伴って理解していると言えます。何度語って聞かせるよりも，「挨拶って嬉しい・気持ちがいい」という体験を積み重ねることが効果的なのかもしれません。そして，「挨拶をしてよかった」というプラスの体験の積み重ねが，挨拶の習慣化につながるのではないでしょうか。

そこで，わたしたちにできるのは，挨拶のある環境をつくること，挨拶＋αを行うことです。子どもは，「自分から勇気を出して挨拶をして，返ってくると嬉しい」と言います。それなら，わたしたちも挨拶があるのが当たり前と思わず，「その挨拶でこちらも元気をもらったよ，ありがとう」とこちらの喜びを伝えたり，挨拶をきっかけに一言，二言，話を続けてみたりすることで，子どもたちの中に「挨拶をしてよかった」という実感を生み出すことができそうです。

振り返りを読むと，「自分から挨拶をする」ということに，心理的なハードルの高さを感じている子たちもたくさんいることがわかりました。「自分から挨拶をする」というのは，「一歩踏み出す」ということです。「一歩踏み出す」ためには，「失敗しても大丈夫」と思える「心の安全基地」が必要です。挨拶という見える姿だけを育てるのではなく，目には見えませんが，一歩踏み出すための支えとなる「心の安全基地」を育てることも，より大切にしていきたいと考えます。

学校の自己評価の結果

自ら進んで学ぶ子（知）

【重点目標】

学習意欲を高める授業を通して，自ら学びに向かう力を育てる

【具体的な取組】

□教師主体から子ども主体の授業へと転換するために，子ども同士で教え合う時間，子どもに任せる時間を保障する。

□習得した知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を身に付けることができるように，問題解決的な学習や探究活動の充実を図る。

【子どもの声】※（　）の数字は学年

□子ども主体の授業

・感想を読み合って，みんなと違うところ，似ているところを話し合えて本当に楽しかった。私が考えてもみなかったことを書いている友だちもいて，すごいなと思った。（3）。

・１学期の時よりも，みんなに「分かる？」「いっしょにやろ！」と声をかけられるようになった。たくさんの人の説明の仕方が聞けるし，分からないことも，たくさんの人が教えてくれて，助け合いって大事なんだなと，あらためて感じた。１学期から一度も話しかけていない，〇〇さんや〇〇さんには，自分からがんばって話しかけたいなと思った。（4）

・理由がなかなか思いつかなかったけれど，相手が意見を言うと反論がどんどん思いついて，たくさん対話に参加できた。（5）

どこがどうなどと，友だちから細かく教えてもらい修正することができた。また，班で協力して教え合うことができた。（5）

・みんなが意見を聞いてくれるので，少しずつ手を挙げられるようになった。（6）

・班交流での説明が少し上達した。（6）

□問題解決的な学習や探究活動の充実

・今日はじめて新しい単元に入ったけれど，「くらしと水」の単元が面白かったから，「くらしとゴミ」も面白いと思う。（4）

・一番楽しかったのは，どうやったら水が飲めるようになるか，自分でやってみたことだ。水は飲めなかったけれど，いろいろなやり方を試して実験したので，ものすごく楽しかった。（4）

・社会科の学習に楽しく取り組めるようになった。（6）

・社会科が好きになった。（6）

【今後に向けた改善の方策】

□子ども主体の授業

わたしたちは，子ども主体の授業によって，子どもの学習意欲がさらに高まると考え，授業改善に取り組んでいます。実際に，授業後の子どもたちの振り返りには，「嬉しい」「分からないこともたくさんの人が教えてくれる」「自分もがんばりたい」等の言葉が並びます。

「子どもに任せる」といっても，何もかも子どもに放り投げるわけではありません。「なぜ，何のために，教え合うのか」「そのことを通してどんな力をつけるのか」「一人一人も学級もどのように成長していくのか」を，教師も子どもも理解していないと，形だけの子ども主体に陥ります。先ほどのような声が子どもたちから出るのは，子ども主体の授業が，自分たちの学びや成長につながっていると，子どもたち自身が実感していることの表れだと考えます。

もう一つ大切なことがあります。それは，子どもたちは，「人との関わりの中で学ぶ」ことを通して，学ぶことの楽しさや自らの成長を実感しているということです。６年生の子どもが，「少しずつ手を挙げられるようになった」のは，「みんなが意見を聞いてくれる」からであり，「班交流での説明が少し上達した」という子のまわりにも，その子の説明を聴こうとする友だちの姿があったことでしょう。そう考えると，子どもたち相互の人間関係をよりよいものにしていくことで，子ども主体の授業の質も高まっていくと言えます。ですから，形だけの子ども主体を目指すのではなく，子どもたち相互の関係づくりも含めて，さらに授業改善を進めていきます。

□問題解決的な学習や探究活動の充実

岩倉南小では，生活科や社会科を中心として問題解決的な学習を進めています。問題解決的な学習とは，例えば，社会科であれば，「みんながそれぞれに調べた事実をもとにして，学習問題のこたえ（概念）に辿り着く」という学習のイメージです。知識の教え込みではなく，問いの解決を通して知識を獲得することを目指す学習とも言えます。

問題解決的な学習の積み重ねによって，「面白い」「気になる」「楽しい」「好きになった」という声が子どもたちから聞こえてきています。学ぶことの楽しさを味わった子どもたちは，自分の中にある問い（はてな）を解決しようと，家に帰ってからも「自ら調べたり質問」したりするようになります。そして，調べたことをもとに，「なぜだろう」「どうしてだろう」と考えるようになります。これこそ，自ら学びに向かう子どもの具体的な姿と言えるのではないでしょうか。

このような学習では，「問い」が重要になってきます。「問い」が子どもの中に生まれたとき，子どもはその解決に向けて，あれこれ考え始めます。授業はもちろんですが，様々な場面の中で「どうなっているの？」「気になる！」「なぜ！？」という問い（はてな）を生み出すことができます。こたえを教える前に，まずは子どもの中に問い（はてな）を生み出すということを意識して，今後も取組を進めていきます

個人懇談会等での保護者の方々の声（重点目標と具体的取組に関するものに限らず，紹介します）

・先生との信頼ができて，困ったことを相談できるようになっていることがうれしい。友達もできて楽しく通っている。（1）
・宿題など，家での学習の習慣がついている。本をよく読むようになったし，がんばれることも増えた。（1）
・宿題に，自分からなかなか取り組めない。給食（食事）にも時間がかかってしまうようだ。（1）
・学校のことを，なかなか話してくれない。もっと学校のことを話してほしい。（1）

・学校再開後は楽しく通っている。「早く学校に行きたい。」と言っている。（2）
・休校中に生活リズムが乱れ，勉強する習慣もなかなか身に付かなかった。今後も休校になることがあると心配。（2）
・休校中に毎週送られてくる課題は，子ども一人で取り組みにくく，親として「やりなさい」というのはしんどかった。（2）
・参観がなかったため，学校の様子が分からない。HP に授業の動画を入れることはできないか。（2）

・休校になって，いつもはあまり考えなかった時間の使い方を子供と共に考えることができた。（3）
・休校中の一日の時間割を子供自身が考え行動していたのでいい経験が出来た。（3）
・苦手な学習だけでなく学校で出来ないことにも，親子でゆっくり取り組めた。（3）
・学習についていけるか心配。また，行事が少なくなり楽しい活動ができないことが残念。（3）

・学校再開によって，子ども同士の関わりが強くなった。学校でしか学べないことがたくさんあることに再度気付かされた。（4）
・子どもが授業の話をするようになった。社会科で水やゴミなど生活に関係していることを楽しく学習する中で，自ら調べたり質問してきたりする姿が見られた。（4）
・学校の様子は直接見ることはできなかったが，お便りなどで様子が知れてよかった。１学期は授業参観がなかったので，また，２学期以降学校の様子を見てみたい。（4）

・毎年担任クラスが変わるので，馴染めず苦労しているが，今年は１学期から楽しく学校生活を送っていて安心した。（5）
・もやもやしたことがあった時，すぐに解決できたようですっきりして帰ってきた。楽しく過ごしているようで安心した。（5）
・仲の良い子と離れたので，友達作りに苦労しているようで心配だ。学級内での友達とのかかわり方が気になる。（5）
・授業についていけていないように感じる。塾へ行っていないため心配だ。補習をして学力保証をしてほしい。（5）

・学校が始まって生活リズムが取り戻せた。安心して学校に通うことができているし，楽しい話を家で毎日している。（6）
・学級通信に子どものノートを載せてくれて，自分の子や周りの子の学習状況が分かってよかった。（6）
・６年生になり，学習面が難しくなってきたことに加えて，休校期間が長かったので不安。丁寧に見てもらいたい。（6）
・家で学校のことを話さないので，参観や行事がないと学校の様子がわからない。小学校生活最後の学年なので，行事等がなくなっていき，いろいろなことが出来なくなるのは残念。（6）

「学校関係者評価」の結果（学校運営協議会理事の方々からのご意見）

これからの社会を生きていく子どもたちに求められるのは，「自分で解決していく力」であり，学校においても「自分で解決していく」体験を積み重ねていくことが重要だ。そう考えると，例年通りアンケートを実施するのではなく，このような状況だからこそ，どのような方法で自己評価すべきかを考え，やってみたという学校の姿勢は評価できる。

アンケートだけに頼らず，子どもの声や姿に着目したのは，ユニークでとてもよい。「自分で考え解決する」という姿を教職員自身が示している。アンケートだと構えて回答してしまうことがある。今回は，普段のノートから子どもたちの声を拾い集めている。子どもたちは，この声が拾われるということを意識せずにノートを書いているので，素直な声が出てきているのではないか。次回はアンケートも活用しての自己評価ということでさらに楽しみである。

【思いやりのある子の育成に向けて】
・子どもたちに挨拶の習慣がつくように，見守りの場面では，挨拶＋一言（二言）を心がけている。今後も，そのような関わりを続け，子どもたちが「挨拶をしてよかった」と実感できるようにしていく。
・異年齢集団の子たちへの思いやりの心が自然な形で育まれるという点で，たてわり活動はよい取組である。
・同年齢集団での交流では活躍しにくい子も，異年齢集団での交流では活躍できるかもしれない。子どもたちが活躍する機会を保障するという点で，たてわり活動は意味があると言える。この活動を通して，子どもたちには自信をつけてほしい。
・異年齢集団での交流では思いやりの心が見られるが，同年齢集団の中での思いやりの心も育んでほしい。たてわりだけでなく，横のつながりの中での思いやりの心にも目を向ける必要がある。

【自ら進んで学ぶ子の育成に向けて】
・学習したことについて，子どもが「家でも調べたい」「家でも試してみたい」と思ったときに，その意欲をサポートできるように，保護者との連携を図っていく必要がある。

【体を大切にする子の育成に向けて】
・登下校時の安全については，「ここは自分たちだけが通っているのではない」「車だけでなく自分たちも止まらないといけない」という意識を持たせていきたい。そのために，横断歩道で「右左を見てね」と声をかけたり，車が通るときには子どもたちを立ち止まらせたりして，子どもたち自身が周囲の安全に気付くようにしている。
・上級生にはルールを守る意識だけでなく，注意することもできるようになってほしい。